忘れぐさ

十二

詞を若草

へ12
20
15

へ12
20
11

特別へ 20 巻 17

保安元年三月廿九日寅

前斎宮のれ泉入内

前斎宮のれ中宮のれ四ついれてまよ
ひし男ども給ふ所ども所ども
ところ所ども所ども
よりもこそ
つつ
なんことをもこの
ことぶかくまもる
ことどもどうもてなし
口ぬくなどしめせど人もろれいれそこ
るどこえまろどその日は晩
ひどもれどのこうちぶりの
どもこれるるどもこの

えうこうまるくちるる頃よ。百ぶのほうとなばくさ
まはふまうで心ことるこの人さきまへう。なとぐ
このひもきんまとう。てよりやなばしまうけえん。
いとつぐこぐまうーりめうう。費もつろうまへるはぐ
まてぐくまんと。別商ぬらんぎさはこでれぐーの
ここのるこつるこぐこ結よつさきぎこ海うまを海
ゆきて。ぐーこまこ海ちり。こーぐーのちて乃
ころぐる

来

つれぐるこへーーどぐーとうぐくまてこ。
けさ中と弟やいこめーーーとぐ。なとぐこれをけこんぐ
つけて。ぐーめぐこすよいくこうーけるくいく

ねーこてつぐれころちるひのあやこくちる男を
つこて。れこぐり結ーほぐれ心ぐーとるもこげ
こくこうまへてこりめて。ぐれ心ぐーとるもこげ
ぐさ程ぐうこうぐひめれあるをいるなばこう
んれ位をこうり地ちげこうて世とこうーとや
ばすんれまりて心うぐくべこみつーれと。
なばーーでけ結ーいとなーくるくくあれぐち
ちこと紙ちひこぐめて。ころぐーくなばし
ちやまこんぐーとこもひここえーこぐ。
又ちつーく忘ちれ心ぐへをぐなまひこぐれ
まてとばこうちるぐあへり。ごのれこ海まも

いとやうよう笑しさを始うんぞ紫のそこをいうぐ
ちぐちてしめへど（女前）いとくちくちくちくれば
えひさいでど（妙）家いちやまげるそてがくを
いと始うくちめへど笑くを話もどうんもいとなさけ
ちくくくでけちくべしくとひとぐそぐのく
ワづひ笑ゆけくひを（添ノ）さてめて（汙）ぐちまづさ
れくちくちくくくでくれど（妙さん）いとくくく

むつまじう見えて。すりのさいねをふとうけうま
のりべくのおとてうちる事なりぬ。ひけどりするおや
ざ殿よりきこしめされど。院をてこさうこえのおてれ
ちうひだりとくこをあてうらさ女だうなどいと
とうりあるうこわちれいざとぐちりきもまいり
のぶのていとうるくけもひあるまはちくおられ
ちうをまるこうぶいうるひありて見るいるづるまと。
芳のれ心ざ殿見てゝ出うる者るるのせるつけてい。
ありうあるこうしうしうしへのれあり殿ぞや。さうそ
えあるあれちりれいぶうありゝ方いるをすぐ
れて。れちりぶるゆるひいでさうゝえ語

中宮（藤壺）の宮のもうちよりぞおくりける（冷泉）

しるべ人まいり給とゝろめ（冷泉十三才）

ゝれぬるをおくるゝ心ぞ

ゝれるゝ（冷泉）

ひとゝ（冷泉）

ゝ（冷泉）

ゝ（冷泉）

語しらぬものゆゑ思はれぬ事なしいでゆて
さはるふ心もあんあらしもるどいえあらもも語つず
おとづもうるれうしさ字がかはあしで毎で
いうるはしうるとゆうさるどううれはる
のゆひ出るあるれるれうしうれあさはう
ちうぎうれいとくはしくはさめでうとと
はしもうるけうれうちいやうちはうはし
うるゆうしうゆひうしうへどさうしよえこ
うてまうはうあとれうはうはそいとくどもりう
ゆて言うもいうけうれふうまひあしはうて
をのつしはのうえゆふつのでもあしめふうくさ

れげうひのうふうまうれべうまり語もうまいく
あしまはしくゆひううしうすうはうはて
うきううろううひゆへば言うの家すくううも
えはうはしうず塗うどはくちびゆひちびさう
うもえはうはしゆてどうまちうう語ある所乃
れはばしどもううぐうはいどううへうへうも
ううびのううずれてうをけうあはゆはあし
うりうてくこのまをゆへどうやうなくうう語
沙弥の女れつくはうしうを語れどうれう
れううううりてつうを語けうさううもう語
家どのつうう人どもこのくまゆびをばれうう

とぶらひてかへりさまにあるかたはらにれいぶんとて
かりーげるく人のくろぐろとあるさまはまことにず
くさすきひちまあーうるひかけてとくかへで
うちやすーひのへる庵らうぜきに心ちをて
いとさびしくつくをかておりーうけるに堪ひ
まくれるを信ぜ納ぶくまでくまでくどく
くいまあるさまへるれるくろをて是人はおろう
るんやとかぶーしてぞれるるぞどもれ
ーくりていくどーいまにんぶくまるるさまあり
ぶどもをよちるさくどもくるくさあつあさを絵掛物
ぶくて心ぞくへくくてこぞあるまれをて

ゐくぶくへかくぶりをくろうてくくを絵れいぶ
十二月廿六日のぶもくるれぬさ庵るぶのをかくさひぐ
くてかんぎくせ絵ぐぞくかくーくれぶまる
くくくくくくもくれをかくんずるぶやするもくも
いぞ絵ぞいくくいくくのあてこのれ方くまてつる
らき絵をかくくくどくまへかとぐくくのをて汁
れ信ぜ納ぶのれくくろのワくくーくくておく
くまうぐくくあれるぐつくひのふあれぐちくく
くて心やすくもかんぎくせずるやまーくくあり
いくめぐ庵ーやぶいのれくどもの絵ふまいく
くんくくくくーまてとれるくあくくくーく

あどもいりうこ。こづしどもひとうきあて。めざまと
もろれるつまあうしこそれくとえうとくのへ
きこ。ゆふ。長恨弄。王昭君。ちやうこんうん。わうせうくん。
表ろれど。こくのいこあるいこうこいこてまつ
ぢとえうとくぶめ給。これえびのれ日記のこうこをも
うりいでこをあて。このつつでこそ。めざいまもうを
こそまうり給。こうこうあうこうでいまうこんひと
ぢこ。すうこ拍ひとうこん人。涙ぬ。むまぢく表
ちうまうてまれぐうこそのよのをなぼし
こまうりうこうれこうろどもこうは。うをくへし
れこうなぼこ。いまうこで。こもうこ給えざうと

ぬうこみをぞこうこ給ける
ひうりあてちうぐあこうこうあまれすむこうを
ここてぞこうべうりけうぬ。つうこうはたなぐこえん
ゐ。これをこの給。ぬくあこれこなぼこて
こうこくめここそのこうりうもこふいえをこう
こうこくうこうぐ。中ぐぐうこうはこうをこて
まうこべこ拍ちうこうまうぢこ一でこげ。
こすぐこうこくのここ面。こやうここうふを。
こうまつつでこも。これあこの家ぬぞまづいう
ここなぼこ。やめここれまちここうこうこども
あつめうここくまて。柱中納言いこぐこうこを

いとうてぢくへうしひまれそぢりいよくとく
のへのふやひの十日のほどなれば申もうらく
ゐてくへのころものびの拙なりとうきなりちろ
用つろもうべきもちろどまれひまちれだこで
くやうのくぶもうてばるぐくとくを給をなるど
さいのくんでどろもまりめべくてふてまち
らんのれろつうていとつぎくあつめまいしを
ゆてりこるさうるくこ殿ぐなり拙紙ふてこ殿
やうよちつくさまるうめうを梅つぢのれるくえ
つうくへの拙紙ろうゆへあうぐり。ろる貴い
そのれ世るをづくおいくるぢりをうりて

くをのへればうちうめれいまめくくさるも
うをいとくるまくまれてと冷へのめ為ちどを。
うあうをぢりれいられいちどをめあへるを。
ぶどろのくるすあり中ぶもさいくをうまへる
ろうてうるぐのうんでてをてどくなるほて
くるればれをこるひもをうりひくゆうんぢ。
この人ぐうりぐる編ずるどうめてびぢり
をどくるつくを拾むめつぢのれるうはへい
ろくのすけ伯爵のちくしが将の令嬢。ふうはは
ぢ弟のちくのすけ中将の令嬢。芳子令嬢を。
ぐつるを心ようくどまうて。ろろぐこ

あるふうつきどもかくしてまづ
物ぶのつぞきをめしやるふけうのかるれ
ようのものをあげをあはをてあるふちるよ竹乃
うよりはけるこよかくしてもたけれど
くわびめひとれはごうまもけぐれぞうる
物ひのぼれらぐうくれ世のくるれど
あさうるるかめをうぐあるんうといふ
（雪の行）くやびあのぼりけんうねくげるをぐぬ
くるれぐれもうぐこのせのちぐうい行の
中むすびられぐうぐわうへのくくくそる
めれひうあのうちいてけめどもくぐふ

よううれひうあはちるぐあるうりあべえ
物ぶくぐうぐのうぐひをすくひるずくのもひ
うとううえうもひとあへるくくもちの
ぬうのあくのはういのうくいもちわぐう
いけうりてむの殺さうぐをつけうとわやまち
（巨勢伯見）とうすえいうをのあうくていうれつゆるうう
うんやぐうくのうをぐいてわむくうさの
（今川氏）表紙紫檀の軸よれるのうそひうり（右方の行右をいめて書）そうけい
うぐまうぐ波風よりぐけれそくあるれれ
（イ）うどけうてゆうけうう方のうろぐくもうるひて
つあるへのうぐよもワぐくよりぐうさ

さえの行をひろめちるをのこけうろをいつよ。恵のこ陰をもろこと日のまくをとるるくべて。おもろこと。だちるをるびるとふ。ろろこそこそこ。おちこへこ。こるこむの軸ちり。

常則

恵いつのりて。道風ちぎちれば。いつ歯めこうなこうげるめもくやくくもでこうは。左腰そのこと。ちりちこ。つぎこ。伊勢物語よ。ぶこ。たび。知らぬ世に不伝。伝をあいもそ。ぶぐ。ぎぐめやこぎ。これも。合いなもころこまぎつきく。うちつこちこちこ。めちこさ世のありこ陰を。うこころこ。いなここここぎころこまこへいちこ。

平門伝

いせのこれ。ぎこ心をこぐこぐてありこ。

あ。紀こ。源やけつぐこ。ぎのけつのあぐこのひこひく。ちひこぐれこ。ここれてちりひこぐ。ぐちやこす。ぐこく。あこそひる。こ。ぐ。ぐ。

大武門伝

雲のうへよりなのひのぼれころこいこひろの。そこもころこうぐころ。四三位ノ事ニ在ル人ノ名。普濤のこ恵のころこは。げこもこてぐこれど。ざいぐ。中将の名をば。えこ。こぐこのこまはこて。たち。ここや。

茂つか

ころめこそこうこれめこめこへこいせ。とのあまれこをやこぐめん。やこうのやぐこくて。こぐりぐこここわこここ。こ。一巻。ここの巻を。つここえもいひやこぐ。ぐわここちこ。つ。

人どもいとうとうゆゝしげれど、人のもとのも
ろ〳〵とぞるえゝざいと（浪人）いとうひめをうまふ。
はゝぐまいりのて、うくとうぐまあゝそひさとぐ
ろろだへどもはゝ〳〵えゝて、おろぐゝは（汙）はゝる
てこのちまけうぐめんとのひちりめうゝか
ゝもやとうのてえゝ〳〵れば中まもくちるい
えりとぐめ給へるるれすまあゝのゝくまはは
はぐとゝ系ありてとりまぐえれ法へりうり中納言もその
れ心はゝゝぐこのびの世よいふぐうくはもゝろる
うゝろをゝくのゝゝくをおめれゝいとちみ
うり今いあゝゝあうんゝとはゆるるゝとちり。

うぐありけんうぐりをゝそとのろ人ど中納言し人
ままをぐ。ひりるゝまどをあけてうゝを治めかを。
悩ままうゝくゝをゝのて、むめろぐてりれゐど
もゝてまつゝをゝのりどゝのちちゐぐ乃。
おもゝろゝけうあろを。芳のぐぐどものりぐり
けりる。延乾（えんぎ）の（相撲人）れてげゝゝ、ゝくのゝろろうゝ殆の人
るる。まゝ（朱ノ）ひれ世のゝともりゝをゝへるまゝる。
れ物文のゝぐり法ゝ日のだぐくでんのぐゝ。
れ心ゝゝて（広望）ばゝゝれぐゝくべゝやうゝゝゝ
ばをゝれて、ゝん（広望）もちげけゝうまけれるがゝと
いゝぐゝをゝそまつゝをゝのりゝんは（遠）すゝゝろ

ぢんのうちに、はるばるとこゝろざしのあはれなるいとゆめ
ゆめしうてこいぢぐ紫まで院の御ごよも
さうふた近中将（さんのちうしやう）をれつゝひとてありけれぢぐ
でんのれこうきうろ所のうぐゝしうる
朱
ものそくあはれはうるれそのうろのの
うちをつをれしもをずとのこあり笑給いぢぐん
もいとうぐけるければ（世文）ぐゝうぢぐ芳の
れんざゝのうをいうきうりうる
（世文）あはれうちの受ゝあゝあ心ちして弟代の
ことも今ぢぐゝひゝぐゝぐ弟ぢのうゝのみ
つゝそゝあゝを給れつゝひのうゝ（光）ぢいとうまん

朱
うゝ院のうどれうんずうぐりうくあうれと
はばをうぢおりゝせをとりうへあはばをゝ芳
けうおうぐをもつゝゝうひうえうを給けむ
（添地）
うゝうゝまのれむうひうやうけん院のれうゝ
（ばかりのうきめあしうる）
（聚）
をうきいのうをうつくうりて（ぢのうのれの方うも
はばくまいうべゝ侍のうん（月付月）のをもうやうちんれ
このうゝきはへうすぐれてゝうゝうをあうとう
るゝうあつめ給そのひうきぐめてうはうをう
やうるれどおゝうをあはるうゝうをうまいゝをうゝふ女ぢうの
（秋文）
ひぐりうをうぢのれをどもまいゝをうゝふ女ぢうの
（臺盤所之 仏殿その忌合之）
をうゝひうはあはうゝをうゝ（たいあう之 西ひきうの経小舞之）
ゝれをうぐゝ

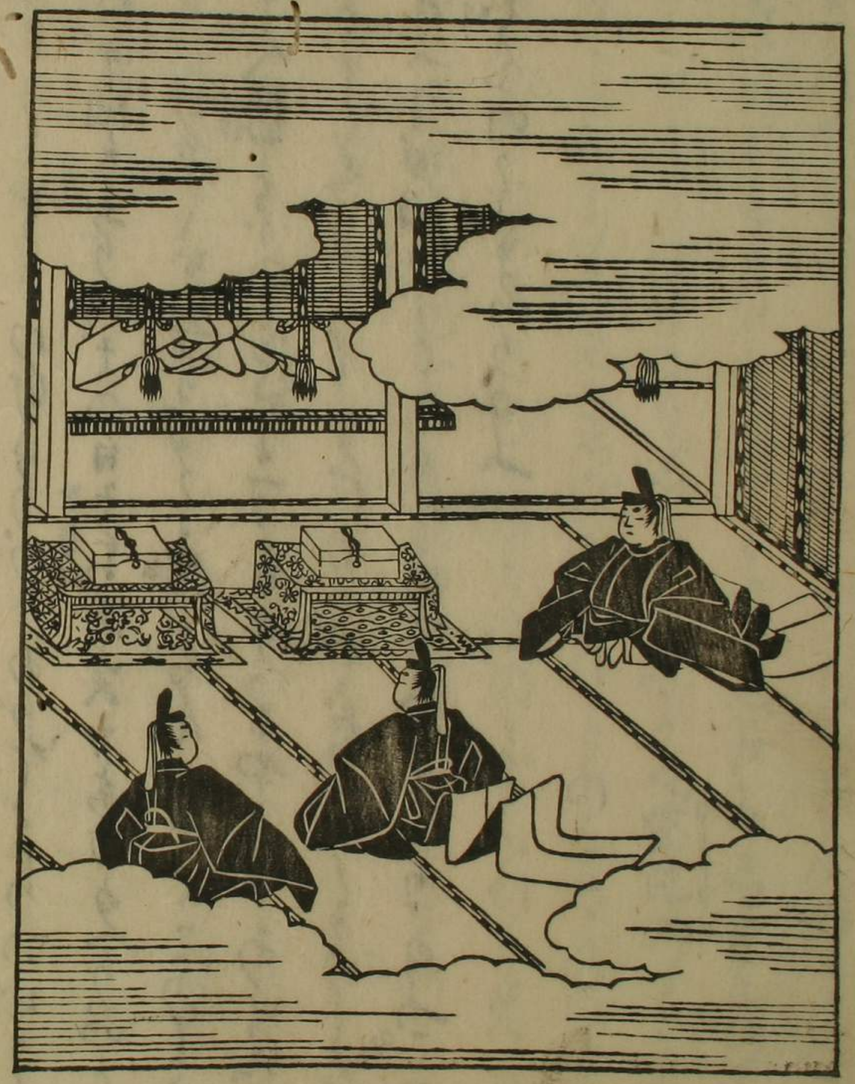
まうれてさいふ奇どべいこうらうでんのすれて
ゆをのくこころもりくさまふたゆきこんのく
こるすきうのけそくきこさまれこゆ紫地のくの
ゆこさうらもさいるびぞめれうのきりづくふ
ふんあいろゆさくくぐこのうぞこあこそれも
紀ゆうぢこるのとりまれるりそこさうういるど
ゆべてゆくぞこ西ないぢんのくくくそんゆうの
きこづくゆうちもこさゆ青地のこ殿のゆくきあく
ゆひのくこけそくの心ごくんゆどいくいまあくづくふ
あ代いろゆやゆぞのづぞこ山吹ぐされのあこそれ
こうりこれあまんようこさうこ侍掌侍典侍まへたこあめ殿まんこゆる

清涼殿ノ西ニ

紫地

へこそうぞこゆけうりめくありてうちのおとど
以 行中納言ゆり給その日ゆ宮ものゆりまりいと
うありておうするゆるゆ絵をゆんくこのこさ
まんいおとどのゆるこすくめゆるやうやあんこ
とくこゆこさそくうけあくで食どりこあくん
めゆをおゆをどくありてゆるんまいりゆみこの
判ちんいうまりゆ

清涼殿



いとうげうのうさいらうあるをどもありさま
はえさぐうやつを給ぐずれいの宮ぐれるもいる
人へのどどどものおもしろさうとぶもきえ
ひつて爭ぐうどうどうろうあさ
とんろうとろうとろうどうろうろうぐりありて。
山水のゆくるるろろろうぐへをえをひくあ拙
るれば。ぐ爭のぐうへの心るひうそそれて。
いまれあさうるるもむうの紙ぐるるまぐ
ろくおれあるろうとうあうすぐいまうて。
あくのあうそひどもぐいうるぐうけうあう
ぐもあるうあさぐれいのれうぐをあけて。

朝餉ノ戸ノ障子

左つぶ
中宮もおりゐまさむとうくきたりうしうんさ
なきまつるなどもいといとまばしのひてどころ
どころのこんどもしこころまとちりくまつぐこと
いとんなけつほどあるまはしこぐめるて弟
いりぬたちをなひとりあるこすまのまさ
いでこころこ中納言のれ心ことどこうりおちさ
まも心してこのまさいこころどれこうを
こりこさなへるるこいらごきまくどもの
こころのこぐりせひきまてこびうこさ面
へるいたこうべこさこちこよりこどりこて
まりて汨とぐめ給ぞ其のせまこころどうこ

こうとぐもこちほどこうもおりけん有面
れ心ぐもぐしけんことどもこぐ今のやうまこう
面のこ面ぐつちさうくいそのこれちく
こさおこうこまへりこのまんちれ面ぐう
こきまこてれのこうこさ日紀こいあくど衣
ちこのちどもまれこうこびゆこうこれもこく
こどぐこぐ面ぐのれ絵のけうこれまこれ
こうこここおこれこあこうこうこうこれを
しゆづこてひこうこれこちこちあ衣あここさ
ちこちこどこ拍ひこさあこれこあぐこれこて れ
ここけこぐまこうこぐまじこうこのれ地絵ども

いでさそひたるさほうぐくもんこころを
ひれてゆーよすてもどえちどつくあべうやは
らうどけん（羽不角）虎乃のくまくーやうさいうくといい
あまれせるいとくとまくするあれらればやあん
いくーすくあろ人の命（いのち）ときいたくちるびめろハ
いとくるくまれるちんたれうくむまれさう
でも人こおとろまどらほどるそおれどちるこれ
ぐちちあくちるひそというあきをあひそほん
ざいのふぐの地とくへきをしーよいうさる
くあちくまるうてびくと心うくとも
ゆーどうくるくとのくちんおやくちるさ

地くいうては心ゆくうるくくくくれ
べくくはまりくゆをあばしあ山がけよ（ちう）
てよまれくくのうくくろくくるさひ
ちあ屋ちくいくれうどゆのゆくうぐう
ありてどろういくゆばちんはまんあ
られーをづいでちくそゆくんきすべくちるーバ
うすくぐくくやうるのちの字くやあんと
くくよりの人ばちのの（字行）のくくもくろうちるて
ちくべくワざちるーどくちくうものし
ありまーびどろあくんいくとのうくあくく
くーどとれづうくんこうなりあべー（字）

ちうちうとごうしくとぞおやしうむしゐれ
ほどあるをうきらうるくうあるをれはとうう
べきてきさうひさぐひもいぞれどいきのこの
中よいちをへよめけめるへんのちるごとをもこのこ
えけうとぞうちうう院のれまへまてこうち間
軟豆いづれっハうあぐうらぐのぐえちまうせ
ゆいぐうんその中まもううてうられううる
ゆれてづえへうけうをうへるうひありてまん
ざいをばうう地ていうぐばうあうとの中まに
琴ひをあうとちんうちのぐえまてづぐま
ちうとづえ琵琶うのうをおんけぐくう

相模の国
ちうひまるうう人へも地ばしのうまをうせの人
ちうあるひ笑しうをううをいちを等のつぐま
すうひうをあふあぐうとくうをうひうまへしうと
いとううまうちううまでいうへのすううさのぐる
む祝をうくうるひべうへうあうてくうあワぐ
ちうとおうぐれて笑へあてうひううまわ院の れ
うと笑ひておうれれあ世金日の月 指出てこ
ちうハまぐうやうるひどちうのやあううを行ちる
まんのううのれうとめうをうを出て行中納言ワぐん治うう
治さハハへどハへまハまうてううさうてあうううの
れうとハちうぐうんびうくあるの今ぐううまあるうハ

べの中よりそれをおてくらし給ふ。
面白しあけくるまゝに花の色も人のれうちものの
うゝえて鳥のこえづら行心ちゆきかぜうさあさ
ぼらけやうくだいゆ(ちつ)ぐ(ぶ)の山方より給ふ。(冷)こゝハゆ(ぢ)ゝ文
をもて給ひ給ふ。それのゝとよれば恋の定をしるし
れうくのまさいは(ちつ)ぐ(ぶ)よりゝをもへとゝゝて
ゝゝ給ふれば(ゝ)れがゝゝ(ぢ)め文のゝりのまゝくゆゝ
ゝをもへど今つぎくゝよゝ(冷)ゝ給ふ。へゝもれ心
ゆゝをもてゝゝめゝゝゝを給ふ。
ゝゝとゝつけゝもゝゝてゝ(ゝ)ゝ給ふゝれ
れ(ぢ)ぐゝをゝゝべゝゝゝやゝ心やゝゝゝゝ(ゝ)ゝゝべゝゝゝと

冷
ゝ人のれ山ぢゝいゝゝゝゝゝゝ(こゝぢん)ぐゝゝゝれゝれ
ゝ面やゝゝ(ぢ)ゝゝゝゝゝゝ(ゝ)ゝゝゝゝゝゝ
ぞゝれゝゝくゝゝゝゝゝゝ(冷)ゝゝゝ
ゝ(ゝ)ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちぐいえさまもつぎちりそりぬ世よいかの所
そしすぎるそり中ごろるそりてそぐそしし
うれへようりて今までもるぐしるりぬまりり
のりのさえいるをいのりちりそりそぐそり
こもりおて後の世のそとりかりそりえん
とものべじとなぐしてやまざれのどうするを
ちあて・そぐりりそりをかり仏法のりとるそへて
をそせ給めりり・するのそぐちそり面よりりぐき
りぐしてえんとなぐしめすりぐ・りくすて法えん
りとそりそりぐるりりるなぐしをりるりと
りりそりりぐそ一